

「浮城物語」論争以前の 内田魯庵・石橋忍月の小説・評論について

楽原 文和

はじめに

19世紀末から20世紀初頭、すなわち近代初頭の日本における文学をめぐる思想や、また文学に関して異なる立場を取る者たちの間に起きた対立について学部の講義で取り上げている。その題材の一つに矢野龍溪やその小説「報知異聞浮城物語」（1890年、以下「浮城物語」）に対して石橋忍月（当時の主な筆名は「忍月居士」）と内田魯庵（当時の主な筆名は「不知庵主人」）がその小説観を非難し、小説にも否定的な評価を与えた「浮城物語」論争がある。現代に通じる、小説は作者の自己表現としての芸術か、それとも読者のための娯楽か、という思想・嗜好の違いが現れたものとして、学生にあなた自身はどう考えるのかと問いかけながら解説している。

受講者の反応としては、どちらの立場もそれぞれ理解できるという柔軟なものが多く、それだけに質問として出てくるのは、なぜ石橋忍月と内田魯庵はここまで頑なに「浮城物語」や、「小説の要は人を悦はしむるに在り」⁽¹⁾「余は彼の有名なる文学家ワルテル、スコット氏が「小説は不善ならぬ娯楽を世人に与る者なり」との語を以て当れりとせん」「読者に娯楽を興ふるは小説の正産物なり」⁽²⁾ というように表明された矢野龍溪の小説観を拒絶するのか、ということになる。

近年の研究では、内田魯庵が「浮城物語」論争以前から小説を「美術」（芸術）と見なし、芸術家としての小説家の地位の向上を求める発言を続けていたことを明らかにした上で、「小説は遊戯文字にあらず」「人情の極微を巧写したるにあらずんば何とて小説の本分を尽したりと云ふべけんや」⁽³⁾と主張する彼にとって小説を「娯楽」と見なす矢野龍溪の発言は小説を戯作としての地位に引き下げるものとして認められなかった、という指摘や⁽⁴⁾、本来なら認められないはずの矢野龍溪の「小説」観を批判しようとする同時代の文学者に対する不満が「強硬」な態度を

取らせたというとなえ方がなされている⁽⁵⁾。

同様のことは、「小説の要は人物の性格、^{キアラクテル アイデア}意想を写すに在り。地位境遇の変化は其性質、意想の発現に如何なる影響を及ぼすやを画くに在り。社会一般若くは一部分の風俗人情を記載し後世をして当時を推想せしむるに在り」「然らば苟も世の小説家を以て自ら任ずる者は此の風俗此の人情此の社会を実写するこそ其本分と云ふ可けれ」⁽⁶⁾と述べている石橋忍月にも言えるだろう。

「浮城物語」論争については、既に矢野龍溪の立場に注目して、小説が持つ情報を読者に伝える「^{エンサイクロペディア}百科全書」的な面や⁽⁷⁾メディアとしての面から⁽⁸⁾論じてきたのだが、その際「浮城物語」と対照的に石橋忍月や幸田露伴から肯定的に評価されていたものとして幸田露伴の芸術家小説を取り上げている⁽⁹⁾。仏師や刀鍛冶や大工を芸術に携われるものとして描く幸田露伴の小説を評価することと、内田魯庵たちからすれば小説を戯作扱いするよう見えた矢野龍溪を否定することとは確かに同じ価値観の裏表になる。

現在から見ると、矢野龍溪が小説を「遊戯」扱いしていたようには読めないのだが、かつて述べたように矢野龍溪の発言には小説を芸術と見なす観点を読み取ることとはできず、そこに大きな立場の違いがあったことは確かである。この芸術以外の「文学」やメディアとして小説を見なす観点が、『郵便報知新聞』で「浮城物語」以前に連載されていた「嘉坡通信報知叢談」の時点で既に貫かれていたことも以前論じている⁽¹⁰⁾。必ずしも「娯楽」としてだけではない様々な側面を小説に見出していたものの、芸術とは見なしてなかった点で激しい攻撃を受けることになったわけである。

内田魯庵や石橋忍月にとっては小説は芸術でなければならなかったのだが、彼らの小説観を決定したのは周知の通り坪内逍遙「小説神髓」(1885～6年)である。坪内逍遙も含めた彼らの小説観に偏向があることについても既に述べているのだが⁽¹¹⁾、彼らの頑なさを裏切るように、彼らの書く小説は、小説という懐の広いジャンルの中で実際は矢野龍溪の主張を認めるようなものになっている。

本論では、以下の流れで「浮城物語」論争以前の内田魯庵と石橋忍月の小説がどのように矢野龍溪の小説観と異なり、また実は重なっているところがあるのかについて論じていく。まず、矢野龍溪「浮城物語」以前に石橋忍月・内田魯庵が発表し

た小説がどのようなものかを検討する。次に石橋忍月の小説について内田魯庵の批判した評論から見えてくる石橋忍月の小説が持つ読者を楽しませる側面を示していく。最後に内田魯庵の小説をメディアとしての側面から読み解き、それが矢野龍溪や彼が主筆を務めた『郵便報知新聞』の小説観と一致していることを明らかにしていく。

1. 石橋忍月・内田魯庵の「人情」小説

矢野龍溪「浮城物語立案の始末」においては「小説の領分は甚だ広し、一方に兎女の態を穿つものあれ一方には偉人傑士の心事を写し出すものあり」と、小説ジャンルが様々な題材を選びうることを述べ、また1890年当時の現状認識としては、「我国近來の小説界」を「文運の進歩實に此時を以て始めとすべし」と評価している。一方で、「惜む所のものは其種類、概ね人情ものに限るが如し」「廣大無辺なる小説界を目して手狭なる樂園と誤想し小説とさへ聞けば男女の情を写すに止り、快闊壯大なる娯樂を到底此界に望み難き者とす」と、発表される小説に偏りがあることを批判している。このような当時の小説の傾向についての認識は、たとえば『浮城物語』単行本に徳富蘇峰（「近時文学愈々細となり、織となり」）や中江兆民（「近日の作者が専ら里巷男女愛慕悦し綢繆纏綿の状を摸写する」）たちが寄せた跋文でも共有されている⁽¹²⁾。矢野龍溪は自身の「浮城物語」をその傾向には当てはまらない「小説界最多数の愛読者たる女子には稍や不向きにして其境を専ら男子のみに限」ったものであると捉えている。

では、その「人情もの」「男女の情を写す」小説というのは、どのようなものだろうか。確かにこの当時の事例には事欠かないのだが、実は石橋忍月や内田魯庵が当時発表していた小説もまたその一例なのである。詳しくは次節以降で述べるが、彼らが「美術」（芸術）として小説を書こうとした時には「小説神髓」の主張のとおり「人情」や「男女の情」に重きを置いたことになる。

いずれも1880年代後半に『女學雑誌』に評論を掲載することから出発し（石橋忍月「妹と背鏡を読む」1887年1月、内田魯庵（「山田美妙大人の小説」1888年10・11月）、その後様々な雑誌・新聞に活動を広げていく石橋忍月と内田魯庵であるが⁽¹³⁾、また両者は初期から小説も発表している。

1888年（明治21年）

2月 石橋忍月「一喜一憂捨小舟」二書房（以下「捨小舟」）

1889年（明治22年）

4月 石橋忍月「お八重」金港堂

5月～7月 内田魯庵「酒鬼」『女學雑誌』

6月 内田魯庵「当世文学通」『都の花』

11月 石橋忍月「露子姫」春陽堂・「元祖風流柳ごし」春陽堂

彼らの登場から「浮城物語」論争前までの間に発表した小説をまとめると上記のようになる。内田魯庵の二作については『内田魯庵全集』別巻の「解説」（野村喬）に「小説「酒鬼」はディッケンズの翻案、（略）「当世文学通」も出所は定かでないが、翻案だったと考えられる」とある⁽¹⁴⁾。また、「酒鬼」はエミール・ゾラ「居酒屋」（1877年）の翻訳として扱われたりもして⁽¹⁵⁾、内田魯庵のオリジナルの小説とは見なされてきていない。

しかし、本論ではどのような小説を自分にとってのあるべきものとして提示しようとしたのかというとらえ方をし、オリジナルか翻案・翻訳かということは問題としないことにする。紙幅の関係から上で挙げた小説のうち石橋忍月の「捨小舟」と「お八重」と、内田魯庵の「酒鬼」を選び、まずはそこで描かれている人間関係を確認しておこう。

2. 石橋忍月の「人情」小説——「捨小舟」「お八重」

「捨小舟」の主要登場人物は河井金蔵と、彼の友人箱田の妹であるお光の二人である。お光は父親の仕事の失敗のために深雪という源氏名で吉原で娼妓となっている。箱田兄妹がまだ大阪に住んでいた頃に河井とお光は知り合っているが、箱田が急死しお光が娼妓となった後の消息を彼が知ることは無く、小説の前半では深雪と名乗るようになったお光が河井と同じ場面では登場することはない。河井の同窓の江澤たちの噂話の中で最近評判の娼妓としてふれられるだけである。全十六回のうち「第十回 はなやしき ならみあ 花屋敷の睨合ひ」で初めて二人は同じ場面に居合わせるが言葉を交わすことは無い。二人の関係がどうなるのか、という関心が「捨小舟」のストーリー

を進めていくが、結局河井は他の女性と結婚し、お光は娼妓時代からの馴染みで父親の世話をしてくれた江澤と結ばれることも無く終わる。

「お八重」の主要登場人物は園井波之助と、彼の友人松葉新一（途中で小名浜に復姓）の妹であることが途中で明らかになるお八重の二人である。両親の死後小間使として務めていた清原家にいられなくなったお八重を救ったのが波之助であり、彼女の境遇に同情した彼はお八重を自宅に住ませる。しかし、波之助の婚約者であるお米が上京し同居するようになると、お八重は自身の存在が彼らの邪魔にならないように身を隠す。

「捨小舟」と違って、波之助とお八重は最初から同じ場面に登場し、お八重に同情だけではない感情を抱くようになっていく波之助と、彼を慕いながらもお米の存在を考慮せざるを得ないお八重との関係がこの小説の読み所となっていく。波之助は偶然田舎で女学校の教師をしているお八重を見つけるものの、結局彼はお米と結婚する。

河井とお光、波之助とお八重はいわゆる「才子佳人」の関係として描かれているように読める。「才子佳人」が作り出すストーリーは近代初期日本で流行した政治小説の多くにおいて見出せるもので、そこから脱しようとしていたはずの坪内逍遙「一読三歎当世書生氣質」（1885-1886年）や二葉亭四迷「浮雲」（1887-1890年）までもが、その枠組みから抜け出せなかったり、またその枠組みのパロディとして影響の下に書かれている。石橋忍月の小説の男女がそれぞれに「才子」と「佳人」であることを読者にわかりやすく示すのは外見についての描写や記述である⁽¹⁶⁾。

まず、「捨小舟」で河井が初めて登場する際には「年齒^{としのころ}二三四色^{いろあざくろ}浅黒く目^め涼しくして威^すく同時に^{どうじ}数物^{すぶつ}を併^{あは}せ見ると云^みふ機能^{はたらき}あり鼻^{はな}は細^{ほそ}くして隆^{たか}く齒列^{はなみそろ}揃^{くちびる}ふて唇^{うす}薄^{せい}く背^{ちうだか}は中高^{たい}にして体^やは瘠^{ほう}せたる方^{ほう}なり」（第壹回 不忍池畔の小宴^{しのばずちはんこざもり}）と外見が描写される⁽¹⁷⁾。目・鼻・唇についての描写は彼が知的・精神的に優れていることを伝えようとするものであるし、またバランスの取れた身体は行動・言動に偏りが無いことを暗示するものでもある。他の男性登場人物と比べると、江澤はよりコミカルな描写になっているし、箱谷は外見の描写自体がない。

一方のお光は先述したように直接本人が登場する場面は少ないのだが、他の人物の噂話の中で「五大洲^{ふたり}中に二人^{ぜつせい}とない絶世^{かじん}の佳人^{きげん}」（第二回 奇言^{たべん}と多弁）と呼ば

れたり、「瓜実と円豊を程善く調合したる断腸的にして明眸柳眉楚々人を動かす先
づ拳止は静肅にして品格あり何辺となく雅趣ありて深窓貴嬢の風あり」（第三回
東台山の笑話）と外見について語られたりしている。

同様に「お八重」での波之助の外見は彼の「才子」としての能力や性格を暗示
し、お八重の外見は彼女が「佳人」であることを示すものである。前者は「顔稍々
長くして色白く、鼻尋常なり、二重眼瞼の眼清らかにして眉毛濃く、丈け余り高か
らず、齒並には申分あるもの其口元に頗る愛嬌あると言語の円滑温和なるとを以
て、之れを補ふに足る、先づ総躰より論ずる時ハ上品なる人柄なり」と、後者は
「年の頃は十七八、媚容人に勝れ」「身体程善くしまり、豊円の顔玲瓏なること珠
の如く、涼しげなる眼に大ならず小ならずして黒点多く、其微笑する時に当つて
は、眼波一転の間に忽ち光彩を増し、恰も草露一滴旭日に輝くが如し、口元にこや
かにして眉毛の撓み塩梅生えぶりも又濃きに過ぎず薄きに陥らず、殊に作者がお八
重の亡母に代つて、人々に吹聴せざるを得ざるハ、両頬に堪へたる、生殺与奪の権
を有する笑靨と、生髪は富士額を画けることの二点にぞある」と語られる（いずれ
も第二回、他生の縁。）⁽¹⁸⁾。波之助は既に高等学校を卒業して「月々莫大の修入」
があるとのことなので、前途は有望だが今は不遇な「才子」というのはずれている。
その代りお八重は言葉を尽してその外見の魅力が伝えられ、また彼女が恩人であ
る波之助に必ず報いようとする「見初めし月日ハ浅くとも、妾が為めに八十稔昔
時の旧知にも優るぞや、生みの親の其次に、大恩あるハ此君ぞや」という心情が伝
えられたりもする（第二回）。波之助も彼女によって「不快を慰め」られ「失望を
回復せしめ」られ、また「進取に導か」れる、と感じている（第八回、露けき
袖）。

このような記述・描写に基づいて、同時代の読者は読み慣れている「才子佳人」
のストーリーを期待することになるが、その期待が結末において裏切られるのは先
に述べたとおりである。「捨小舟」で河井と結婚する田村春子は作中で「美人」（第
壹回）や「佳人」（第十回）と語られてはいるのだが、江澤によれば「日本女子の
中では学問があると言つてもいゝかしらんが」「男子の助力で生活する一人だ」（第
十一回 淡泊なる面白き主人）と評されており、「才子」を支える「佳人」として
の要件にふれられていない。「お八重」のお米も波之助のたわいもない挨拶の言葉

を「先祖代々より伝つたるお家の重宝の如く珍重し」（第四回、君ゆゑに。」ていたりして、やはり男性に依存せざるを得ない女性として描かれる。登場人物や語り手によるこのような女性評がどこまでの的を射ているかは疑う必要はあるものの、読者が素直に受けとめてしまえば、いずれも「佳人」としての条件を持っていない女性と結婚しているように読まれてしまうわけである。

人間関係やその展開において政治小説と共通する旧来の枠組みを用いながらも、あえて男女の登場人物の恋愛を成就させなかったところに「捨小舟」「お八重」の新しさがあるとも考えられる⁽¹⁹⁾。なぜ、「才子」的な登場人物である河井と波之助は「佳人」的な登場人物であるお光やお八重と結ばれようとしなかったのか、その「人情」を描くことがこれらの小説の主眼となることになる。

次節では「捨小舟」「お八重」における「人情」に焦点を絞ってみよう。

3. 「捨小舟」「お八重」における「人情」

「捨小舟」の河井は「矯俗会」にかかわり売買春や「花柳の地」を風俗を乱すものと見なす立場で、吉原の娼妓深雪となったお光と会うこと自体を逡巡している。その一方で以前は好意を抱いていたこともあり、家族の事情で「女郎になつたも無理はない」のだから、「世間を顧みず貰つてしまはうか」とも考えている（「第九回 心裡の迷夢」）。「心裡の迷夢」というサブタイトルのとおり、第九回は彼の逡巡が中心となっているが、吉原で深雪（お光）と会ったことについての河井の「述懐」→再びお光を訪ねた際の二人の対話の場面→帰宅後の河井の書斎でのモノローグという形で河井の「心裡」を直接記述する形になっている。他の回の多くは地の文と会話からなる形式となっており、第九回は「愛情ハ名誉の爲めに棄てねばならぬ」「名誉は愛情に敵し難し」此二つはどつちが真理だらう」と、同情や愛情と、「苟も社会中等以上に位する身分で学者とも言はれる者が女徳を破つた娼妓を妻としたと言はれちや生涯の不名誉だ」と「世間」からの眼を慮る心との間で迷い躊躇う河井の「人情」を描くことに重点を置いたものである。

しかし、最終的に彼がお光と結婚しなかったのは、河井が江澤に送った手紙によると、「所謂愛情と功業とは両立せぬ場合情を汲まんか業成り難し業を望まんか情捨てざる可からず予は断然この場合にては奮進鋭意情を捨て、業を取らんと欲す」

という（第十一回）。お光への「愛情」よりも、立身出世という近代の新しい価値観に従い、「名誉」や社会的地位を得る「功業」の方を優先したわけである。

また、「お八重」の波之助には婚約者のお米がおり、彼女の両親から一家が被った恩のためにその婚約を破ることは難しい境遇にある。先述したようにお八重と共にいることで慰めや励ましを受け、彼女への感情は「潔白なる愛情」と自分に言い聞かせているのだが、波之助の母親から身を引くように促されたお八重は彼に知らせずに身を隠してしまう（第八回）。「才子佳人」の物語であれば身を引いた女性を探し求め最後には結ばれるのだが、波之助がお八重を見出した時、既に彼はお米と結婚してしまっている。

波之助が友人であり実はお八重の兄であることがわかる小名浜新一に対して語るところによれば、お米との結婚は本人の意志とは関係なく母親や親類が進めているものであり、相思相愛のお八重を見限るのは許されないことであると考えているようである。もっとも彼の言葉は「それでも、どうもお八重さんに対して、人倫に顧みて……」と途中で途切れており、それを引き取って新一が「君の精神ハ僕が承知してゐる、今更人倫と云ふのハ既に遅しだ」と理解を示している（第九回、計らざりき）。この場面では波之助の心中が直接描写されることはなく、家族への義理とお八重との愛情とがそれぞれ彼にとってどのくらい重いのかは明確にはわからない書き方になっている。その点は次節で取り上げる「お八重」への批判につながってくる。

「浮城物語立案の始末」が批判していたのは発表される小説の傾向が偏っていることであって、「男女の情を写すに止」る小説そのものではないのだが、「快闊壮大なる娯楽」を書いていない小説家たちを批判しているようにも読みうる。そのように受けとめた上で、「男女の情を写」した石橋忍月自身の小説を価値づけ直すものとして彼の「報知異聞（矢野龍溪氏著）」は書かれている⁽²⁰⁾。小説は「人間生活を写すを以つて目的となさざる可からず、人と運命との間を規定する天然の法則を出さざる可からず」なのであり、その基準に照らして彼自身の「男女の情を写す」「捨小舟」「お八重」は正統な小説なのであり、「人間生活を写」しているとは言い難い「浮城物語」は正統ではない、という理屈になる。

前段落で引用した「報知異聞（矢野龍溪氏著）」の小説の条件に関わる記述は、

坪内逍遙「小説神髓」の「ひたすら世間にあるべきやうなる情態をのみ描きいだしてさながら真物のごとく見えしめむことを望み方めて天然の富麗をうつし自然の跌宕を描き読者をしてしらずしらず其仮作界に遊ばしめて而して隠妙不可思議なる此人生の大機関をバ察らしむるものなり」⁽²¹⁾ という記述の影響を受けたものである。そして、同じ主張は内田魯庵にも見られる。「浮城物語」を読む」では矢野龍溪の小説観を批判する際に、「小説は人間の運命を示すものなり。人間の性情を分析して示すものなり。而して最も進歩したる小説は現代の人情を写すものにして、此意外に小説なしと云ふも可なり」⁽²²⁾ というやはり「小説神髓」の影響を受けた小説観が表明されている。ここで注目したいのは、小説観が近いはずの内田魯庵によって石橋忍月「捨小舟」・「お八重」が批判されているという点である。

4. 内田魯庵による石橋忍月の小説批評

内田魯庵は藤阿彌というペンネームを使った紀行文の中で「忍月謫天不知庵など云ふ木葉批評家」⁽²³⁾ という自身と石橋忍月を並べる言い回しをしており、同時期に出発し活躍する「批評家」として意識していたと思われ、実際石橋忍月の小説についての批判も全否定に近い厳しいものである。「捨小舟」を取り上げた批評は無いのだが、「お八重」についての批評の中で「余は既に「捨小舟」に於て失望せりと述べ、さらに続けて「遠慮会釈なく申せば「お八重」は江湖の読者を失望せしめし「捨小舟」よりも劣れり」と「お八重」も否定している⁽²⁴⁾。「若し人情の秘奥を曲写すれば陳套の脚色猶ほ許すべしと雖ども、「お八重」は果たして人情の秘奥を曲写せしものか」と、ここでも「人情の秘奥を曲写」する、すなわち「人情」が「写」せているかどうかが第一の基準になっている。さらに、続けてその描き方について詳細に述べているのだが、そこで問題になっているのは、次のように地の文に「読者作者等の文字を濫に挿入して」いることである。お八重が園井波之助と話しているうちに彼に助けられた時のことを思い出した際の記述である。

思はずポロリと涙一雫、およじんせい凡そ人世あるとあらゆる涙のうちについもつとせいけつ最も清潔なる、
 最も深切なる真心を含み、生命の棄殞をも、猶ほ許す程の価値ある涙ハ、如何なる
 涙なりやと問はゞ、作者は此憐む可き一滴、しかも明かなる眼波の間より離れ

きた 来ッて、しろ ほう 白き頬をたどり行く一滴なりと こと 答ふるも、あへ ぐわげん あり 敢て過言に非ざる可し。(第一回、あれやこれ。)

お八重の涙を美しい言葉で飾りながら、「作者」は「過言」を避けるとしてその意味について直接語ることはしない。同様の記述は波之助に手紙を書こうとするお米についても「此不意の嘆息には、無限無数の意味あるべし、業平の読者諸君は、胸に手を当て、考へ玉ふべし」というように用いられている。このような書き方は「人情」を「写」すことに正面から取り組んでいない、「余は考ふるに人情小説の妙は読者をして主人公と同感の意を起さしむるにあり。如何にして同感を起さしむべきか、他なし……唯真面目の筆を以て真面目の事実を写すのみ」「何故に心中を心理的に写して余味を読者の想像に任せざるや」というのが内田魯庵の批判である。

モノローグではなく地の文を用いてどのように登場人物の心理を描くのかという方法上の問題に「お八重」は正面から取り組んでいないという批判は首肯できる。しかし、だからといってそれが「真面目の筆」で書かれていないとは限らない。「真面目」に読者を楽しませるために「作者」「読者」を登場させたり、次のように先行する演劇や小説に言及する記述を行ったと考えられる。

はる の おも むれ て ふ みち とぎ くさばな ふ わ く かうしまへ はな おりえだもち
春の野面に群る蝶、道の伽する芳花を、踏み分けて来る格子前、花の折枝持そへ
て、みあは かほ かんかいは ぬまづ だん いそ あが ぐち ていねい
みあは かほ かんかいは ぬまづ だん いそ あが ぐち ていねい
に両手をつき、頭を下げ。(第一回)

お八重は口の中にて。

八「モウ、寡婦になるのはいやでございます。

むろんし せき あいだ 無論咫尺の間の波之助にさへ聞ゆる能はず、只紅唇の顫動したるを以て何事か
とろ 吐露せしならんと波之助は推せしのみ若しこれが西洋の小説なれば、二人手と手
を、しツかり、きわ 極めてしツかり握りつめ、せつぶん い べい ところ
を、しツかり、極めてしツかり握りつめ、接吻したと言ふ可き所。(第六回、きぬへ。)

前者はお八重の待つ家に帰ってきた波之助の様子について浄瑠璃・歌舞伎の演目

「伊賀越道中双六」(浄瑠璃は近松半二・近松加作の合作、1783年初演)の「沼津の段」を彷彿とさせるものとして語り、後者ではお互いに思い合っているのにその気持ちを伝えようとしない波之助とお八重について、「西洋の小説」と比較して恋愛に対して消極的であることを述べている。前者にはお八重への親愛から浮かれている様子の波之助への揶揄的なニュアンスを読み取ることもできるし、それは「看官」すなわち読者の反応を先回りした言葉とも考えられる。また、後者は進展しない二人の関係に焦れる読者、「西洋の小説」を読み慣れている読者をなだめているように読み取ることもできる。

このような地の文での作者から読者への呼びかけ、読者の批判を先回りして言い訳するような言葉は、内田魯庵が「遊戯文学」として批判している戯作に見られるものである。小説を書くことに「真面目」さを求める内田魯庵からすれば、それは認められないものだったわけだが、しかし小説のそのような記述を否定する根拠は実はない。新しい小説を目指していたとしても、先行する小説と無関係なものを書くことはできない以上、また読者が読み慣れた方法を用いることで新しい小説を受け容れやすくするのも一つの方法であり、旧来の小説と共通する部分があるのは当然である。それは、前に指摘した「才子佳人」の物語についてもそうだし、地の文でのメタフィクショナルな記述についても同様である。

石橋忍月の小説は彼の評論の狭隘さや偏りと比べると、ずっと実践的であったわけだが、同じ小説観を持つ内田魯庵にとっては受け容れがなかったわけだ。

それでは、その内田魯庵の小説はどのようなものだったのだろうか。

5. 内田魯庵の「人情」小説——「不孝」ものとしての「酒鬼」

内田魯庵が「浮城物語」論争の前の時期に発表していた小説が、彼のオリジナルであることが疑われていることについては既に述べた。ただ、翻案だったとしてもある小説を選んで日本語化して日本を舞台にするように書き換えている以上、そうするだけの価値はあるという判断は行われていたはずである。また三作の中には先行論文で翻案というとらえ方自体を否定されているものもある。本論ではその「酒鬼」について取り上げる。

「酒鬼」についての大貫俊彦による論文では⁽²⁵⁾、海外の先行小説との関係につい

では「ゾラやディケンズの西洋小説の着想を取り込んだ不知庵なりの「人情小説」の試みであるとの説を提出」している。確かにディケンズ「呑んだくれの死」やゾラ「居酒屋」といった翻案・翻訳の元とされてきた小説と重なる部分は多くはなく、後に述べるように日本の先行する小説・浮世草子との関係が読み取れる部分もあり、「西洋小説」との関係では説明できないところもある。

大貫論文では、従来この小説が同時代の「禁酒運動」、「酒鬼」の掲載誌である『女學雑誌』も関わっていたそれとの関係で書かれたという見方をされていたことについて⁽²⁶⁾、「小説のなかに禁酒をすすめる言辞が見られるという理由だけで、不知庵が禁酒を宣伝する小説を書いていたと判断するのは、早計である」と述べ、「酒を飲んだことによる、あるいは酒を飲ませたことによる罰、すなわち死が物語内容のレベルでも説かれている」と指摘する。それに加えて「酒鬼」の山澤家が士族階級として凋落していく「時代状況」、「時世」が表れており、その「悲惨」さ、憂愁を沸き起こす読み」が飲酒への戒めと「併存している」というとらえ方が提示されている。

このような先行研究をふまえて、あらためて小説ジャンルの複数の可能性から「酒鬼」を捉え直してみよう。石橋忍月や内田魯庵が小説における「人情」の重要性を説いていたとしても、小説ジャンルがメディアとして機能してしまうものであるということは避けられない⁽²⁷⁾。小説をメディアとして活用していた矢野龍溪を否定しようとも、内田魯庵自身が書いた小説が飲酒を諷める思想に貢献するメディアや、様々な問題を抱える社会の現状を伝えるメディアとして機能することは当然ありえるのである。その点で、矢野龍溪や『郵便報知新聞』による独立したのではなく他のメディアと関連付いていくメディアととらえる小説観は、彼の批判者である内田魯庵の小説をも包含するものだったと言える。

では、飲酒に溺れ身を滅ぼす男をメディアとして描き出している「酒鬼」は、どのように書かれているだろうか。「酒鬼」は同時期の石橋忍月の小説とは異なり、「才子佳人」の枠組みでは書かれておらず、親子及び夫婦の間の「人情」を中心として書かれている。夫婦だけではなく親子関係も描かれているところから、この小説の先行者として西鶴の「本朝二十不孝」（1686年）を想定できる。

「酒鬼」は酒で身を持ち崩した士族山澤作次と、その家族との間に起こった出来

事を描いている。彼の母親は作次が酒を止められぬことを嘆き、嫁のお須磨に苦勞をさせていることを不憫に思っている。お須磨は夫が不甲斐ないために姑を苦しめ、娘のお時を同じ士族でありながら成功している家に奉公に出していることを面目なく思っている。近所で起こった火事から家族を残して一人で逃げ出した作次は、火事がもとで母親が死んだことを知るが、それでも酒を止めることはできず、悪友の手にかかって命を落す。

酒で身を持ち崩した男性とその家族の悲劇は「本朝二十不孝」では「八人の猩々講」における母の死に目に会えなかった墨屋団兵衛として描かれている⁽²⁸⁾。団兵衛は猩々講と呼ばれている「名のある八人の大上戸^{だいじやうこ}」たちに飲み比べを挑んで体調を崩し、母親に意見されるが、「酒に捨つる命、何惜しからぬ。今にも我往生せば、沐浴も諸白をあびせ、棺桶も伊丹の四斗樽に入れ、花山か、紅葉の洞に埋まれたし」と開き直って飲酒をやめようとしな。それを思い悩んで母親は死んでしまい、団兵衛は「死目にあはず、はるか後に夢さめて、なげくにかひぞなかりき」と愚かな振る舞いの結末が語られる。

何かに溺れ、その耽溺が何をもたらすかに思いうたらず親不孝をしてしまう姿をよく描いているが、坪内逍遙や内田魯庵たちの立場からすると、団兵衛がそのようにふるまう心情やそこに到る来歴が十分に描かれていないということになるだろう。彼は初めから酒好きとして登場し、彼の行動と母親に向けた言葉が伝えられているだけだからである。そして、団兵衛に家の没落という酒に溺れる理由を与え、次のような「人情」を与えたのが「酒鬼」だということになる。

人情——此二字は作次が異見される時の詞だが作次とて人情を知らぬものかは。酒と云ふ悪魔が此世になくば仏作次と云はるゝ善人。常日頃氣立の悪しきにあらねど咽三寸が子よりも可愛ひか親よりも大事か一銭が二銭でも巾着の底をたゝくまでも舌打して妻や母の嘆も新内浄瑠璃を聞くほどにも思はず、近所の貰ひ泣を見れば血ばしり眼で大声あげて罵る。それでも醒た時は——酔はぬ折は「ア、悪かつた」と気の附ぬでもなく「お母さん明日からは禁酒しますぞ」と口の下から「お名残にタツター杯」を子供の様なねだり言、禁酒と云ふが嬉しさにジヤア是ツ切りダヨと許せば一杯一杯また一杯と限のなき飲明しお心よしと名ある相貌も

舌なめずりするその強らしさ。よしや常はお人よしでも二十四孝に上戸はなしといふものを。(其六)⁽²⁹⁾

「人情」、ここでは母親や妻の心配や悲しみと考えられるが、それを「知らぬもの」ではないはずの作次が、なぜ家族を裏切って飲酒に溺れるのか。作次の側の「人情」、彼のどうしても酒を遠ざけられない弱さを伝えようとしている。引用の最後に「二十四孝」という言葉が出て来るが、この小説はその裏返しである西鶴「本朝二十不孝」を先行者とつつ内田魯庵たちの考える近代の小説として書き換えられているのである。

前に述べたように「酒鬼」は海外の小説と関係づけられてきたが、引用関係を持たせる場合、自身の基準に適うものを出会った様々な小説の中から選んでいるはずである。その際の基準として、親しみ評価している西鶴の浮世草子と近親性ということがあったと考えられる。内田魯庵は西鶴について、馬琴に比して評価する者が少ないことを嘆き⁽³⁰⁾、「趣向よりは寧ろ人情の微を穿つに意をもつばらにせしが如し」⁽³¹⁾「深く味へば西鶴は奇警なる眼光をもて靈妙なる筆を弄びしにあらざるならんか」⁽³²⁾と評価している。同様にディケンズについても「些事を取りて巧みに材料を索引し人情の秘奥を穿つを以て趣意とせり」「人間の肺腑に立入りたるは他の及ばざる処なり」という賛辞を捧げている⁽³³⁾。一方で西鶴については「悉く端物にして広く人間を観察せしも社会の一部に過ぎず、殊に性情を面白く写せしも其変化流転する所以を詳かにせず、深く世態と人情の関係する処を説明せしに非ず」とも述べている⁽³⁴⁾。西鶴の浮世草子についての不満を解消するために、ディケンズなどの小説の要素を導入したのが「酒鬼」だったととらえられる。

では、そのように「人情」を描こうとした「酒鬼」はどのような小説として意味づけられるのか。「捨小舟」「お八重」と並べてまとめていくことにする。

おわりに——「捨小舟」「お八重」「酒鬼」と小説のメディア性

ここであらためて矢野龍溪や『郵便報知新聞』における小説の位置づけ、そのメディア性への注目について確認しておこう。前半で参照した「浮城物語立案の始末」では、「読者に娯楽を与ふるは小説の正産物なり、世を矯め俗を激し、人を戒

め時を諷するは是れ小説の副産物なり」と述べ、「日本の盛衰存亡は常に外より来るを知らしめ、遠航貿易の務めざる可らざるを知らしめ、海外の風土、人情、物産を知らしめ、現世紀の兵器は理科学の所産なるを知らしめ、理科学の貴むべきを知らしめ偉人傑士の風采を想望せしむる等は則ち余が望む所の副産物の中に在り」と「浮城物語」がメディアとしてどのような情報を読者に伝えているかを強調する。矢野龍溪は小説をメディアとして読者や他の言説との関係でとらえており、だからこそ「浮城物語」や様々な欧米の小説の翻訳が掲載された『郵便報知新聞』は、小説と他の記事とを連携させるように編集されていた。

そのような小説のメディアとしての側面に注目すると、石橋忍月「捨小舟」「お八重」、内田魯庵「酒鬼」、これらのいずれもが近代の新しい社会に対応できなかった人々の惨状と、新しい時代に成功しようとしている人物を対比的に描いていることが見えてくる。

「酒鬼」で作次の娘のお時は近所に住む成功した士族の家で奉公しているわけで、士族がみな没落しているわけではない。同じように近代という新しい時代を迎えても、それに対応できたものとできないものがあることは大方の目にするところであり、それは当時のメディアが取り上げる貧困の問題にもつながっていた。「捨小舟」でお光が遊女になるのは、父親箱田左衛門が重役を務めていた銀行が負債のために閉店し、所有していた株は無価値になり、さらに左衛門が他人の負債まで引き受けてしまったからだ（第五回 梅田の^{かなしみ}悲泣）。また、「お八重」で波之助がお八重を助けるきっかけになったのは、士族である父親が息子の放蕩のために財産を失ったためである（第二回）。経営に失敗して身代を失うとか、子の放蕩により親が身を持ち崩すとかいう展開は、「本朝二十不孝」にとどまらない西鶴の浮世草子でも描かれている状況ではある。しかし、銀行という新しい組織や、「酒鬼」と同様の士族の没落というのは、時代が当時の人々が直面した近代以前とは少し異なる不幸の生じ方・在り方を伝えようとしているものととらえられる。石橋忍月や内田魯庵の小説もまた小説のメディア性に奉仕していると言え、彼らが否定した矢野龍溪の小説観の正しさを彼らの小説が証してしまっている、ということを指摘して本論のまとめとしたい。

注

- (1) 単行本『報知異聞浮城物語』。(報知社、1890年)の矢野龍溪による「自序」。引用は『明治文学全集 15 矢野龍溪集』(筑摩書房、1970年)による。
- (2) 「浮城物語立案の始末」『郵便報知新聞』1890年6月28日～7月1日。引用は『明治文学全集 15 矢野龍溪集』(前出)による。以下同じ。
- (3) 「小説は遊戯文字にあらず」『女學雑誌』193号(1889年12月25日)。署名は「蘿主人」。引用は『内田魯庵全集』第一卷(ゆまに書房、1984年)による。
- (4) 森田三咲「明治二〇年代の内田魯庵と「小説家」の地位向上——作法書ブームの前史として——」『リテラシー史研究』7、2014年。
- (5) 大貫俊彦「「強硬」な不知庵——『浮城物語』論争における内田不知庵の「小説」の保持」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第三分冊54、2008年。
- (6) 「浮雲の褒貶」『女學雑誌』74・76・79・80号、1887年9月3日・17日・10月8日・同25日。引用は『明治文学全集 23 山田美妙・石橋忍月・高瀬文淵集』(筑摩書房、1971年)による。
- (7) 「エンサイクロペディアとしての小説——幸田露伴と「浮城物語」論争——」『近畿大学日本語・日本文学』6、2004年。<http://kuwabara.a.la9.jp/study/pdf/encnovel.pdf>
- (8) 「メディアとしての小説——一八九〇年の「報知異聞浮城物語」——」『近畿大学日本語・日本文学』7、2005年。<http://kuwabara.a.la9.jp/study/pdf/mednovel.pdf>
- (9) 「エンサイクロペディアとしての小説——幸田露伴と「浮城物語」論争——」(前出)。
- (10) 「「嘉坡通信報知叢談」論——メディアとしての小説——」『文学・芸術・文化』(近畿大学文芸学部論集)第21巻1号(通巻第46号)、2009年。https://kindai.repo.nii.ac.jp/?action=repository_uri&item_id=7862&file_id=40&file_no=1
- (11) 「エンサイクロペディアとしての小説——幸田露伴と「浮城物語」論争——」(前出)及び「享受者を分つ境界線について——小説読者不信の系譜——」『渾沌』(近畿大学大学院文芸学研究科)第4号、2007年。<http://kuwabara.a.la9.jp/study/pdf/reader.pdf>
- (12) 引用はいずれも『明治文学全集 15 矢野龍溪集』(前出)による。
- (13) 早くには野村喬がこの時期の「批評壇を実際に支へていた」二人として両者を並べて論じている。「石橋忍月と内田不知庵——一八八〇年前後の文芸時評——」『国文学』1961年9月号、『傍流文学論』(花伝社、1998年)所収。

- (14) 『内田魯庵全集』別巻（ゆまに書房、1987年）。
- (15) 明治翻訳文学全集《新聞雑誌編》『ゾラ集』（大空社、1998年）所収の「明治翻訳文学年表（ゾラ編）」（川戸道昭・榊原貴教編）による。
- (16) 近代小説に対する「才子佳人」物語の影響力については、林原純生「『舞姫』—隠蔽された政治小説—」『森鷗外研究10』（和泉書院、2004年）を参照。また近代日本初期の「才子佳人」物語の枠組みで書かれた小説においては、ある登場人物を「佳人」と示すためにまず見た目にわかりやすい美しい「容色」、「器量の好い」ことが示された。本来「佳人は外見が美しいだけでは佳人たりえず」、「才子の才能を見抜き、彼が能力を存分に発揮できる環境を作り出すことがより重要な条件」だが、わかりにくいその条件に先立ってまず、外見の美しさを読者に示すという傾向があった。詳しくは以下を参照。「自然主義の小説と通俗性——排除される佳人——」『文学・芸術・文化』（近畿大学文学芸学部論集）第30巻1号（通巻第64号）、2018年。https://kindai.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=19861&item_no=1&page_id=13&block_id=21
- (17) 「捨小舟」の引用は国会図書館デジタルコレクションによる。<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/873635> 以下同じ。
- (18) 「お八重」の引用は国会図書館デジタルコレクションによる。<https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/885695> 以下同じ。
- (19) 「自然主義の小説と通俗性——排除される佳人——」（前出）では、「自然主義」を標榜する島崎藤村や田山花袋たちが書いた小説において、そもそも男女の恋愛がストーリーを進める力にならないように抑制されていることを指摘しているが、「捨小舟」「お八重」にその萌芽があるのかもしれない。
- (20) 「報知異聞（矢野龍溪氏著）」『国民之友』1890年4月3日。引用は『明治文学全集15 矢野龍溪集』（前出）による。
- (21) 「小説神髓」の「小説の種類」、引用は『明治文学全集16 坪内逍遙集』（筑摩書房、1969年）による。
- (22) 「『浮城物語』を読む」『国民新聞』1890年5月8日、16日、23日。引用は『内田魯庵全集』第一巻（ゆまに書房、1984年）による。
- (23) 「安房巡礼」『国民新聞』1890年3月28日・30日・4月1日。引用は『内田魯庵全集』第五巻（ゆまに書房、1984年）による。

- (24) 「忍月居士の「お八重」」『女學雑誌』161-162号、1889年5月11日-18日。引用は『内田魯庵全集』第一卷（前出）による。以下同じ。
- (25) 大貫俊彦「共鳴する裏屋の響き—内田不知庵「酒鬼」論」『早稲田大学高等学院研究年誌』56号、2012年。引用は以下同じ。
- (26) 柳田泉「小説「酒鬼」について—内田巖氏に送る」『読書感興』1936年4月・第二号（『随筆明治文学3』東洋文庫、平凡社、2005年）、稲垣達郎「解題」『明治文学全集24 内田魯庵集』筑摩書房、1978年。
- (27) 「メディアとしての小説——一八九〇年の「報知異聞浮城物語」——」および「「嘉坡通信報知叢談」論——メディアとしての小説——」（いずれも前出）を参照。
- (28) 「本朝二十不孝」の引用は『新編日本古典文学全集67 井原西鶴集②』（小学館、1996年）による。
- (29) 「酒鬼」の引用は『内田魯庵全集』別卷（前出）による。以下同じ。
- (30) 「馬琴の小説」『女學雑誌』161号、1889年5月11日。
- (31) 「馬琴小説の効果」『女學雑誌』164号、1889年6月8日。引用は『内田魯庵全集』第5卷（ゆまに書房、1984年）による。
- (32) 「日本小説の三大家」『小文学』一号・二号、1889年11月21日・28日。引用は『内田魯庵全集』第5卷（前出）による。
- (33) 「チャールス、ヂッケンス伝」『女學雑誌』173号・175号・176号・177号・178号、1889年8月3日・8月17日・8月24日・8月31日・9月7日。引用は『内田魯庵全集』第5卷（前出）による。
- (34) 「好色五人女序」『好色五人女』武蔵屋叢書閣、1890年12月。引用は『内田魯庵全集』第5卷（前出）による。